

「恥ずかしさ」に着目した性教育の課題

—保健体育科教員へのインタビューデータを用いた探索的考察—

反 橋 一 憲

1. はじめに

本稿は、性教育において生じる恥ずかしさに着目して、性教育の課題を明らかにすることを目的とする。具体的には、恥ずかしさが授業にどのように影響しているのか、そしてなぜその影響が生じるのかを、中学校と高等学校の保健体育科教員に対して行ったインタビュー調査から、生徒と教員双方の立場に着目して考察することを目的とする。

性教育を教育学的に研究する場合、人工妊娠中絶や HIV/AIDS、性感染症など性に関する健康問題や、ジェンダーやセクシュアリティの問題を解決するために、学校における性教育の課題を改善して充実することを主張する研究が少なくない（例えば橋本ほか 2011）。

それでは、学校における性教育の課題とは何か。例えば、学習指導要領において性教育が体系化されていないことや生物学的な観点の不足など、カリキュラム的な問題点を指摘する研究がある（橋本ほか 2011）。しかし、カリキュラム的な問題点を解決したとしても、まだ問題点が残るのではないか。それは、恥ずかしさの問題である。中澤（2013）が「性のことをなんて恥ずかしいから、学校できちんと教えてもらいたいという感覚があるのではないだろうか」（p. 178）と保護者の気持ちを推測しているように、性について話をするとき、恥ずかしいという感情が生まれるのではないか。松浦（2011）は、小学校における性教育の授業場面で、児童が恥ずかしさを感じている様子を紹介している。このように、性知識を教える際には大人と子どもの双方に恥ずかしさが付随する。それゆえ性知識の伝達が容易に行われないのではないか。本稿は性教育における恥ずかしさを分析・考察の対象とし、従来唱えられてきた性教育の課題に新たな知見の付与を試みる。

性教育における恥ずかしさについて触れた先行研究はいくつかある。例えば、遠藤・中野（2006）は、教員が「性教育」という語に恥ずかしさを感じていることを明らかにした。しかし、遠藤・中野は教員が恥ずかしさを感じる理由を考察できていない。また、遠藤・中野は本稿が関心を持つ児童生徒の恥ずかしさには全く触れられていない。さらには、恥ずかしさが授業にどのような影響を及ぼしているかも不明である。松浦は子どもが感じる恥ずかしさの原因を考察した。松浦は周囲から性に関して慎みを持つと言われるにつれて、他者の視点で自己の内面を気にするようになり、「恥ずかしさ」が生じると主張する。しかし、この松浦の主張は子どもの恥ずかしさを念頭にしており、教員が感じる恥ずかしさには目が向けられていない。さらに、恥ずかしさによって授業中にためらいが生じ

れば、授業の進行が滞るはずである。松浦は性教育を深化させる契機として恥ずかしさをとらえるのみで、恥ずかしさの否定的な面には目を向けていない。このように、恥ずかしさに言及した先行研究はあるものの、恥ずかしさが性教育の授業にどのような影響を及ぼしているか、なぜ恥ずかしさが生じるかについては、十分明らかになっているとは言えない。

そこで、本稿ではインタビュー調査を行い、①性教育における恥ずかしさが授業にどのような影響を与えているのか、②その影響がなぜ生じるのか、この2点を教員へのインタビューを分析して考察する。なお、本稿では、保健体育科における性教育を分析対象とする。性教育は学校全体の教育活動で実施されるが（反橋 2016）、保健体育科は性教育を主に実施している時間として教員からも生徒からも認識されている（岡部・佐鹿・大森ほか 2009、橋本ほか 2011）。

以上を踏まえて、保健体育科の教員を対象に 2015 年 6 月から 11 月にかけて半構造化インタビューを行った。調査対象者は表 1 のように、高等学校の保健体育科教員を基本としつつ、中高一貫校で中学生も受け持っている保健体育科教員や、保健体育科の教員免許を持っている小学校教員にもインタビューを行った。ただし、勤務校はほぼ関東地方の私立学校に限られている。氏名は全員仮名であり、年齢・勤務校はインタビュー当時のものである。インタビューでは保健体育科教員の志望理由、性教育を行う際に心掛けていることや生徒の様子、性教育における学校と家庭の関係を尋ねた。本稿はその中から性教育の難しさにおいて恥ずかしさに言及があったデータを用いる。

本稿の流れとして、第 1 節（本節）にて本稿の概要を述べる。第 2 節では、恥ずかしさが授業にどのような影響を及ぼしているかを明らかにする。第 2 節を踏まえて、第 3 節では教員にとって恥ずかしさとは何か、第 4 節では生徒がなぜ恥ずかしさを感じるのかを検討する。最後に第 5 節で本稿の総括を行う。

表 1 調査対象者の一覧

氏名	年齢	性別	勤務校（すべて関東地方）	出身大学
田中	28	男性	A 小学校（公立・共学）	国立教育大学 国立教育大学大学院
吉野	26	女性	B 中学校・高等学校（私立・共学）	私立大学体育系学部
阿久津	34	男性	B 中学校・高等学校（私立・共学）	私立大学体育系学部 私立大学大学院
正田	26	男性	B 中学校・高等学校（私立・共学）	私立大学体育系学部
小出	25	男性	C 高等学校（私立・共学）	私立大学体育系学部
中山	53	男性	C 高等学校（私立・共学）	私立大学体育系学部
柴田	35	男性	C 高等学校（私立・共学）	私立大学体育系学部
久保田	53	女性	C 高等学校（私立・共学）	私立大学体育系学部
三輪	59	女性	D 高等学校（私立・女子校）	私立大学体育系学部
池田	53	女性	E 中学校・高等学校（私立・女子校）	私立大学体育系学部

2. 恥ずかしさが授業に与える影響

本節では、恥ずかしさが性教育にどのような影響を与えているか、インタビューデータを分析して明らかにする。分析に当たっては、教員自身に与える影響と、教員と子どものやり取りに与える影響の2点から分析する。

教員自身に与える影響

教員自身が感じる恥ずかしさに関して、20代女性の吉野先生の語りを取り上げる⁽¹⁾。

私自身が1年目のときに、性教育をやるとなるとこっちがちょっと、恥じらいじゃないですけど、やっぱりちょっと恥ずかしいというか、でも大事なところなので、私が躊躇した感じでモゴモゴ喋っても伝わらないし、「先生も恥ずかしいんじゃないか」というふうにならないように心掛けましたね。生徒は聞いて恥ずかしがってという部分はあると思うんですけど、私も1年目のときは私自身に恥じらいがあったので、そこら辺は他のベテランの先生達から、そういうところはズバツとしっかり1つ1つ言って教えていかないと、という話をして、意識はしましたね。〔吉野〕

吉野先生は教員になって1年目のときは性に関する話をするのが初めてだったこともあって恥ずかしさを感じていた。しかし、教員は恥ずかしさを感じてはいけないと考えている。教員が恥ずかしさを感じてそれが生徒に伝わることを危惧しているのである。

ところで、インタビューにおいて恥ずかしさを感じるかと教員に尋ねたところ、他の教員は恥ずかしさを感じるとは回答しなかった。むしろ、恥ずかしさを感じてはいけないと強調する。上述の吉野先生も恥ずかしさを感じたことがあるとしながらも、なるべく毅然として授業に臨むようしていると述べている。恥ずかしさを否定する他の教員の語りは、例えば以下のようなものである。

（注：笑いながら）戸惑っちゃったらだめでしょう。だったら言わない方がいい、戸惑っちゃうんだったらね。恥ずかしいとかでしょ。そういうのですね。恥ずかしがっちゃうとか戸惑っちゃうとか、そうなっちゃうんだったら言わない方がいい。先生も恥ずかしいなんていうのは。〔阿久津〕

阿久津先生は、教員が性教育を行うときに恥ずかしさを感じてはいけないと強調する。生徒は恥ずかしいとしても、教える側の教員にそのようなことがあってはならないのである。この語りからは、阿久津先生が本当に恥ずかしさを感じているか否かは不明である。しかし、恥ずかしさを意図的に抑制しようとしていることが分かる。

生徒に与える影響

前項では、恥ずかしさが教員自身に与える影響を分析した。本項では子どもに与える影響を分析するが、インタビューは教員にしか実施していない。そこで、教員が子どもとの授業中のやり取りをどのように感じているかを分析することで、間接的ではあるが恥ずかしさが子どもにどのような影響を与えているかを明らかにする。

性教育を実施するとき、子どもが恥ずかしさを感じて発言量が減り、授業を円滑に進めることが難しいと教員は考えている。2名の語りを紹介する。

男女一緒に授業展開していくと、恥ずかしい部分が子どもたちにはあると思うので、普通の分野に比べて質問は少ないのかなと。こちらが投げかけていても、あまり意見がボンボン出てくるのかではなくて、例えば食事とか運動とかいうところであれば、「昨日の朝食何食べましたか」と言ったら答えてくれることが多くあるのですが、性教育の方だとなかなか質問を生徒がしてこないという印象があります。恥ずかしがっているんじゃないかな。〔柴田〕

やっぱり返ってこないんですよね。みんな恥ずかしがるので、こちらが質問したこととかもやはり答えてくれないんですよね。それこそ答えにくい分野なので難しいかもしれないですけど、でもこちらが求めている答えとかも発言してくれなかったし、キャッチボールが全然できないというのがあります。〔小出〕

柴田先生は、保健の他の分野と比べて、性に関する分野だと生徒に恥じらいがあり、生徒の発言が減ると話している。小出先生も生徒が恥ずかしがるために、発問をしても答えが返ってこないと話している。この点は、生徒からの発言が多いと授業が進めやすいと話す正田先生の語りからも説明できる。

性について、いや、今の、常に保健の授業のどの分野でも結構盛り上がってくれているんですが、性についてだと生徒全体が恥ずかしがったり、それについて発言をすることが周りからどう見られるかわからないからのか、発言をしなくなることがすごく多くなるので、今年は結構助かっています。〔正田〕

正田先生は今回受け持ったクラス生徒の発言が積極的であるために助かっていると話している。以上をまとめると、生徒の積極的な反応があると教員は授業を進めやすいと感じるが、生徒が恥ずかしさを感じると発言が減り、その分教員にとって授業の進行が難しくなる。

生徒は恥ずかしさを感じて発言量が減ると教員は語るが、生徒はその時どのような様子であろうか。正田先生は「男子は少し含み笑い、女子は完全に下を向いたりとか、ちょっと拒否^{マズ}る感じですね。もしくはシーンとなる。」と、男女混合で授業を実施することで生徒の性別によって態度が違うと話

す。男子生徒は少し笑うなど表情に表れる一方、女子生徒は関心がないように装い、教師から話しかけられるのを拒むのである。このような状況は小出先生の語りからも確認できる。

〔小出〕そうですね。特に女子生徒はすごい気が滅入ってきちゃうんです。男子生徒は「先生！」みたいな感じで、こうだよああだよとかいう答えはしてくれるんですけど、例えば女子生徒は恥ずかしがってしまいますね。それは歳の差なのか、と思っちゃいますね。

〔筆者〕授業をやっていて、男子生徒は発言が多いけど女子生徒は黙ってしまうということですか。

〔小出〕そうですね。ほとんど喋らないですね。こっちが聞くと何となく喋れますけど、例えば女の子の生理の順番とか、生理が来なかったらどうするのか、妊娠検査薬使うのか、そういうことでも、教科書に載っていることでもやっぱり答えられなかったりとか、その分野だけ（恥ずかしがって）、興味は持っていると思うんですけど、やっぱり恥ずかしがったりして。（後略）

小出先生の場合、男子生徒に比して女子生徒の反応が鈍く、そのために気が滅入るとも話す。女子生徒に教科書に載っていることを尋ねても答えが返ってこないと話す。このように、性教育における反応の鈍さは、男女混合における授業において女子生徒により顕著のようである⁽²⁾。

これまで、生徒の反応について分析してきたが、表立った反応だけでなく授業を聞く態度にも恥ずかしさが生じているのではないかと推測する教員もいる。

やっぱり男子と女子が一緒にやるんですよ、うちの性教育。その部分では男子には聞けるけども女子には聞きにくかったりとか、女子は聞きやすい話があって男子は聞きにくい話があって、というのはもちろんこれはあると思うんですけど、そこは気にしちゃうとあれかなと思って気にしないようにはしています。ただ、生徒は聞きにくい話と聞きやすい話があるんじゃないかと思います。〔阿久津〕

阿久津先生は、生徒が異性についての話を聞くことさえも難しく、生徒にとって聞きやすい話と聞きにくい話があると推測する。教員の側はその部分を気にせず授業を進めるものの、生徒は恥じらいを感じながら授業を聞いているとも考えられる。

小括

本節の分析から、性教育における恥ずかしさが授業にどのような影響を与えているかが明らかになった。すなわち、教員は恥ずかしさを意図的に抑制しようとしており、生徒は恥ずかしさゆえに授業中の反応が鈍くなっていることが明らかになった。次節以降、この2点についてそれぞれ理由を考

察する。

3. 教員が恥ずかしさを抑制する理由―「教員―生徒」関係の維持

本節では、第2節で明らかになったことの1つ目、教員が恥ずかしさを意図的に抑制しようとする点について、その理由を考察する。このことを、女子生徒に性教育をやりづらいと感じるかという質問に対する中山先生の語りから考察したい。

〔中山〕 やっぱりやりづらいのはありますよね。でも、やるとすればはまってやらないと。恥ずかしいと思ってやると舐められちゃうよね。変に見られちゃうから。男の先生だったら。

〔筆者〕 先生いやらしいとかですか。

〔中山〕 そうそう。そういう見方されちゃうから。パーッと書いていけば、生理のことだってなんだって書いていけば別に。それを恥ずかしがって言っていると、変に勘ぐられちゃうのがあるからね。変に勘ぐられないようにしなければならない。

教員の感じる恥じらいが生徒に伝わると、その教員がいやらしい目で見られて舐められてしまうと中山先生は考えている。舐められることを防ぐために、恥ずかしさが伝わらないよう授業を進める必要があると考えているのである。ここには、変な誤解を避けて教員の体面を保持し、教員と生徒の関係を維持しようとする教員の試みが見て取れる。

教員と生徒の関係を維持するために教員は恥ずかしさを表してはいけないと考え、恥ずかしさを抑制する。このような教員の試みは、近藤（1996）が述べる、教師のコミュニケーションの特徴から考察することができる。近藤によれば、教師は子どもとのコミュニケーションにおいて、生徒に対して優位な関係を維持することを試みとする。そして、子どもに対しての『『大きく高く強く』という教師の地位が突き崩されること』（p. 60）を恐れて、教師は子どもによる侮りに極めて敏感であるとする。

中山先生の「変に勘ぐられないようにしなければならない」は、子どもによる侮りに対して敏感になっている発言である。中山先生は生徒からの侮りを防ぐために、恥ずかしさを見せないように心掛けている。すなわち、授業を進める教員が恥ずかしさを示すことが、生徒による侮りを招く可能性がある。侮りを招くと生徒に対して教員が優位に立つことができない。そのため、恥ずかしさを抑制していると言える。

しかし、恥ずかしさを抑制しても教員が生徒との関係を維持するのは一筋縄でいかない。子どもが教員のプライベートな経験を尋ねるとき、その関係の維持は困難となる。ベテランの先生による授業と比較して自身の授業について述べる小出先生の語りには、生徒との関係の維持が難しく悩んでいる様子が見て取れる。

やはり私も歳が近いので、なかなか生徒も生徒で接しやすいので、言いたいこととか恥ずかしいこととか、そういうのも歳をとっている先生には言わないことを、変な話じゃないですけど、お兄ちゃん感覚じゃないですけど、友達感覚で先生とか、そういう感じに言われるのが、正直こちらとしてもキツイ、厳しい。答えづらいこととかもすぐ聞いてきたりするんで、やはりそういうのは歳の差で感じますね。近いのは難しいなど。〔小出〕

小出先生は、生徒と年齢が近い分、生徒から私的な経験を尋ねられることに難しさを感じている。近藤は、教師が子どもに対して優位に立つために、「教師が与えるメッセージの中に」は「教師についての情報が皆無だという特徴」（p. 57）を見出している。この特徴には、子どもを前にして『私』を出してはいけない、「ありのままの自分をさらけ出してはいけないならない」（p. 58）という強烈な神話に縛られている教師の意識が込められているとする。これを逆に言えば、教師が自己のプライベートな情報を話せば、その分教師の立場が相対的に低下するということである⁽³⁾。小出先生がプライベートな情報を尋ねられることに難しさを感じるのは、生徒が尋ねるままに返答して教員と生徒のコミュニケーションが「友達感覚」に陥ることを、つまり生徒との関係を維持できなくなることを恐れているからである。

以上をまとめると、教員にとって恥ずかしさは生徒の前で抑制すべきものである。恥ずかしさを示すことで、教員が生徒に対して優位に立つという教員と生徒の関係が崩壊する可能性がある。この可能性を認識している教員は、教員と生徒との関係を維持するために、恥ずかしさを見せないようにして授業を進めている。すなわち、生徒とのコミュニケーション次第では、性教育は教員が生徒に対して優位に立つという教員と生徒の関係を崩壊させる可能性がある。

4. 子どもが恥ずかしさを感じる理由—ポルノグラフィ的な意味づけ

本節では、第2節で明らかになったことの2つ目、生徒が授業中に恥ずかしさを感じて発言量が減るなど反応が鈍くなる点について、その理由を考察する。

第1節でも言及したように、松浦は性に関して慎ましさを求められてきた子どもが他者の視点で自己の内面と向き合って恥ずかしさを感じていると述べる。この時、松浦は「恥」と「恥ずかしさ」を区別する。すなわち、前者は他人によって面目を失ったときの表現、後者を自身の内面を気にする表現だとして、性に付随する恥ずかしさは後者に位置すると松浦は述べる。三戸（2005）は恥を「恥辱」と「羞恥」に区分し、前者を他者から受けるもの、後者を自身の意識や心の問題とする。これを当てはめれば、松浦が述べる「恥ずかしさ」は「羞恥」に相当する。

しかし、性に関する話は必ずしも羞恥を催すわけではない。生徒が感じる恥ずかしさについて話す吉野先生の語りに着目したい。

「お前言えるだろう」とか、そういう風な感じでやっぱ照れがあったりとか、答えにくいって

う。多分中学生、中2中3とかであれば教科書にウンコとか描いたりとか、ふざけるシーンとかはいっぱいあるんですけど、こう休み時間中にそういう言葉を言っている、やっぱ授業で私たちが入って、こう向き合っているじゃないあ授業でそういう話をしていますよ、となるとシュンとなります。〔吉野〕

吉野先生によれば、生徒は授業時間外に友人同士で会話するときは性に関する話をすることに問題はなく、むしろふざけているぐらいである。授業では性に関する話ができなくとも、普段の日常会話でならそのような会話も可能で、羞恥は感じていない様子である。このことを踏まえると、友人同士では性に関する話ができても教室ではそれが難しいと言える。ふざけた会話では羞恥を感じないが、真面目な会話では羞恥を感じているのである。

なぜ真面目な話で羞恥を感じるのか。それは、性に関する真面目な話が下ネタと同様に、エロティックなイメージを伴ってしまうからではないか。猪瀬（2010）は中学生・高校生に対して月経観と射精観を調査して、特に射精に対して罪悪感や羞恥心、不浄感などの否定的な感情があることを明らかにした。その理由の1つに「射精がポルノグラフィ的表象として意味づけられている」（p. 14）ことを挙げている。ポルノグラフィは「快楽の道具」（赤川 1999, p. 109）、より踏み込めば「性的に露骨で、かつ女性を従属的・差別的・見世物的に描き、現に女性に被害を与えている表現物」（中里見 2007, p. 18）と定義される。これらを踏まれば、射精という生理的現象をポルノグラフィ的に意味づけることは、射精を「快楽と女性支配の象徴」と捉えることであり⁽⁴⁾、後ろめたさを感じて恥ずかしさが生じるのである。

この猪瀬の指摘を援用すると、授業で真面目になされる性に関する話も、ポルノグラフィ的に意味づけられてしまうのではないか。猪瀬は性的欲求や性的欲望がポルノグラフィとして語られるとする。授業で扱われる性に関する内容には、生殖など性行為と結びつくことで性的欲求や性的欲望と間接的に関連するものや、異性への関心の芽生えなど性的欲求や性的欲望と直接関連するものがある。したがって、授業における性に関する話が、本来ポルノグラフィとは関係ないはずなのにポルノグラフィ的に意味づけられ、エロティック⁽⁵⁾なイメージを伴ってしまうのではないか。

友人同士でのふざけた会話では、エロティックな内容を互いに了解しているから、性に関する話がポルノグラフィとして意味づけられても何ら問題ない。一方で、授業はエロティックな話をする場ではない⁽⁶⁾から、ポルノグラフィ的に意味づけることは不適である。それにもかかわらず、授業における性に関する話をポルノグラフィ的に意味づけてしまっている。これが羞恥の原因ではないか。すなわち、エロティックな話をする場ではない授業において発言することで、周囲から「エロティックな話を堂々としている」と評価されることを恐れているのではないか。このような評価を恐れた羞恥が、授業における生徒の反応の鈍さにつながっているのであろう⁽⁷⁾。

しかし、ポルノグラフィには快楽（エロティック）だけではなく、女性支配の一面もある。この点は、第2節で述べた男女混合で授業を行う場合は女子生徒の方がより反応を示さなくなることと関連

するだろう。男子生徒に比べて女子生徒の反応がより鈍い理由は、男子生徒から快楽や支配の対象とされることへの危惧があるのではないか。すなわち、授業中に発言して男子生徒から「エロティックである」と評価を受け、男子生徒から性的欲求・欲望の対象として妥当だと思われることを恐れているのではないか。このような事態を防ぐために、女子生徒はより反応を示さなくなるのではないか。したがって、授業中に羞恥を催す理由が生徒の性別で異なると示唆される。

ところで、前節で述べたように、教員が生徒に対して優位な関係を維持するため、教員は恥ずかしさを意図的に抑制している。本節での考察を踏まえれば、教員が恥ずかしさを示してしまうことは、性に関する話にエロティックなイメージを抱いていると生徒に評されてしまうことを意味するのではないか。すなわち、教員も生徒と同様の感情を抱いていると生徒に評価されてしまうのである。教員が生徒と同等の存在であると認識され、生徒に対する優位な関係は崩壊してしまう。だからこそ、教員は恥ずかしさを生徒に見せないように心掛けているとも言える。

以上をまとめると、生徒が感じる恥ずかしさは、授業における真面目な話がポルノグラフィ的に意味づけられるために生じる羞恥である。生徒が羞恥を催すと、授業中に反応を示さなくなる。

5. おわりに

本稿は、中学校と高等学校の保健体育科教員に対して行ったインタビュー調査から、性教育において性知識を伝達するときに生じる恥ずかしさが、授業にどのように影響しているか、その恥ずかしさがなぜ生じるかを、生徒と教員双方の立場に着目して考察した。

生徒にとって、恥ずかしさは性に関する話がポルノグラフィ的に意味づけられて生じる羞恥であり、授業中の反応を抑える原因となる。教員にとっては、恥ずかしさは生徒に対して優位な関係を維持するために抑制すべきものである。このように、恥ずかしさに着目することで、教員と生徒の双方にとって性教育が悩ましいものであることが明らかになった。

今後の課題をいくつか述べる。まず、調査対象となる教員を私立学校の教員に限らず、公立学校の教員からも選ぶことで、よりデータを精緻化する必要がある。あるいは、生徒に対するインタビュー調査ないしは質問紙調査など、生徒から直接データを収集する必要がある。生徒から直接データを収集することで、生徒にとって「恥ずかしさ」がどのような存在か、よりリアルに検討することができる。また、第3節、第4節における考察がやや飛躍している点是否めない。これらの考察が妥当であるか、より実証的な検証も求められる。特に、生徒が催す羞恥の程度やその理由が性別によって異なることが示唆された。生徒（そして教員）の性別を考慮に入れた検証が求められる。

注(1) 以下、語りを引用する際の、下線、あるいは注などの括弧書きはすべて筆者によるものである。

(2) 女子校の教員である三輪、池田の両名からは、生徒の反応が鈍いという話を聞くことはなかった。筆者が池田先生とのインタビューで、共学で授業を実施する場合の女子生徒の反応に言及すると、池田先生は「微妙でしょうね。反応しづらいでしょうね生徒さん達ね。女子だけなのできっと反応できるんだと思いますね。」と語った。このことから、女子生徒にとっては男子を目の前にすることで反応が鈍くなると言える。

- (3) ただし、授業においてはプライベートな情報がある程度話すことが求められる。それは、結婚や出産といった教員自身のライフイベントである。ライフイベントの体験談は授業をわかりやすくする。このことに直接言及した語りはなかったが、体験談が話せず授業の展開に難しさを感じる正田先生の以下の語りが物語っている。

特に性についてなんか、私は男性なので女性の痛みだったり、分からない部分がたくさんありますし、まあ結婚されて子どもがいる家庭だったら子どもの話もできますし、体験談が具体的に話せない部分は、少し話の広げ方が難しいと思います。（後略）〔正田〕

この点に関しては第4節で言及するが、エロティックなイメージと結びつきやすい話題について語ることが憚れるであろう。

- (4) これは、猪瀬による「性欲の発露と暴力が不可分に結びつくこと」が「射精に対して『罪悪感』をもたらし」（p. 14）という主張とも整合的であろう。ただし、猪瀬は中里見の定義を援用しており、支配の面により着目していると言える。
- (5) ポルノグラフィ的な意味づけのうち、快楽の面にひとまず着目している。女性支配の面に関しては後ほど論じる。
- (6) 猪瀬は、「性的欲望や性的欲求について公的に語ることをタブー視する見方が根強い」（p. 12）と述べる。教室を公的な場と見なせば、エロティックなイメージが結びついた性的欲求や性的欲望を教室で語ることはタブーである。つまり、教室では性に関する話にエロティックなイメージを付随させるのは、タブーであると言えよう。
- (7) この点に関して、意図的に抗う教員もいる。久保田先生は、若手教員による授業見学を受けたときの様子を以下のように述べる。

教員として見に来るので、どうですかと私から聞く感じです。その先生たちに、何かを言うというよりも見ていてどうですかと言うと、「全然恥ずかしいとかいう感じじゃないですよ」って。だって恥ずかしいことではないので。性教育が恥ずかしいという先入観で教員が教えちゃったら恥ずかしいものになっちゃうので。確かにお話をされていて新任の先生はやりにくいと思っているでしょうね、多分。〔久保田〕

久保田先生は生徒が羞恥を感じさせないように心掛けている。このことは、教室でエロティックな話をするのがタブーではない状況を作ろうとしている、あるいは性に関する話からエロティックなイメージを排そうとしている試みと言える。

引用文献

- 赤川学, 1999, 『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房。
- 遠藤紗貴子・中野明德, 2006, 「思春期・青年期における性教育のあり方についての一考察—教員へのアンケート調査から」『福島大学総合教育研究センター紀要』創刊号, pp. 9-16.
- 橋本紀子ほか, 2011, 「日本の中学校における性教育の現状と課題」『教育学研究室紀要—「教育とジェンダー研究」』第9号, pp. 3-20.
- 猪瀬優理, 2010, 「中学生・高校生の月経観・射精観とその文化的背景」『現代社会学研究』第23巻, pp. 1-18.
- 近藤邦夫, 1996, 「“教師という役割”と教師・生徒関係—教師と子どもの人間関係を中心にして」堀尾輝久・久富善之ほか編『〈講座学校 第6巻〉学校文化という磁場』柏書房, pp. 43-71.
- 松浦賢長, 2011, 「恥ずかしいという気持ち」『心とからだの健康』第15巻第10号, pp. 58-63.
- 三戸公, 2005, 「戦後日本の恥の喪失—真・善・美」と恥」『教育と医学』第53巻第3号, pp. 4-12.
- 中里見博, 2007, 『ポルノグラフィと性暴力—新たな法規制を求めて』明石書店。
- 中澤智恵, 2013, 「性情報源として学校の果たす役割—性知識の伝達という観点から」日本性教育協会編『「若者の性」白書 第7回青少年の性行動全国調査報告』小学館, pp. 177-198.
- 岡部恵子・佐鹿孝子・大森智美ほか, 2009, 「大学生の認識をもとにした高等学校における性教育の現状と課題

（第1報）」『母性衛生』第50巻2号，pp.343-351.

反橋一憲，2016，「保健体育科における性教育の位置付けと目標・内容に関する一考察」『早稲田大学教育学会紀要』第17号，pp.88-95.